寫經に用ひられたる乎古止點圖

吉澤義則

寫經に用ひられたる乎古止點圖といふ題であります。隨分漠然たる名の附方でありますが、今日は乎古止點は何宗旨で用ひられて居るか、何の爲に用ひられて居るか、何時から始つたかといふ事、主に此の三つの點に就て極概略の御話を致して見たいと思ふのであります。

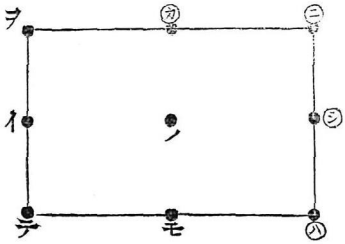
隨分此の題目は專門的な物でありまして從つて御解り難い點があるかも存じません。先づ乎古止點といふ名から御話しをしたいと思ひます。乎古點といふ名稱も或ひは若い御方には御聞きになつた事すらない御方もあらうかと思ふから、先づ其の名義から申して置きたいと思ひます。其の名義を御話しするには乎古止點の種類を一通り御話する必要があるのであります。種類の名から申し上げまする。乎古止點圖といふものが出來て居ります。最も普通に見られますものでは群書類從の雜の部には入つて居ります。夫から國書刊行會の敎育の部には入つて居りますが、此の刊行會本はどういふ麁忽な事をしたものか讀み方丈が示してあつて點が缺けて居る爲に一向役に立ちません。一般には群書類從の雜の部に依つて見るより外に仕方がありません。寫本でも可なり澤山傳つてあります。其の中でも圖の數に增減がありまして一定して居りませぬ。其れ等の點譜中に載つて居る全部

九九

を茲に出して見たいと思ひます。

一、喜多院點

二、西墓點



西墓點といふのは、墓といふ字を書いたのゝ外に基といふ字を書いて西基點となつて居るのがあります西墓は本當らしく見ゆないので私も西基點が本當であらうと信じて居つたのであります。所が段々調べて見ると、矢張り西墓點がよいといふ事が解りました。文字には少しも意味はない、當字であります。此れがよからうと思つたのは、中に西陵點と書いてあるのがあります。法隆寺所藏の點圖にさう有ります。この墓陵は同訓によむのであらう。即ち墓であらう(基ではない)、墓の方がよいと氣附きました。夫から更に考へて見ますと今迄全く氣附かずに居りましたけれども詰り西墓といふのは上圖ニ、シハ、カ、の點を並べて言つた事に私は氣附ました。

もう一つ是によく類似した點を申すと尙ほよく解るのであります、それは

三、仁止波迦點

といふのであります。この星點は西墓點と少し違つて居るばかりです。

この四點を名として仁止波迦點と申して居りまして、夫から見ると西墓點の名の起原も明かになつたのであります。

四、叡山點

五、智證大師點
六、寶幢院點
七、妙法院點
八、中院僧正點
九、禪林寺點
一〇、東南院點
一一、東大寺點
一二、圓　堂　點
一三、香隆寺點
一四、遍照寺點
一五、池上律師點
一六、池上阿闍梨點
一七、淨光房點
一八、水　尾　點
一九、觀眞君點

二〇、順曉和尙點
二一、天仁波流點
二二、廣隆寺點
二三、三寶寺點

先づ私が集めました點圖の中に載つて居りますのは、此の二十三圖でありますが、是は皆寫經の方に用ひられた點であつて、俗書に用ひられた點は是れ以外にある。外典に用ひられた點は是以外にあるが夫は用がありませんから今日は申しません。

此の中で一番始めに擧げました喜多院點。喜多院といふのは興福寺の喜多院であります。喜多院點といふのは明詮が用ひてゐた點で法相宗で用ひられた點であります。此の點は興福寺が中心になつて居りまして、法相宗は勿論奈良地方の他の宗旨では律宗等でも矢張り此の喜多院點を用ひて居ります。

夫から西墓點、仁止波迦點、夫から叡山點、智證大師點、寶幢院點、妙法院點、是は天台宗で用ひた點であります。其の中で此の西墓點といふのは三井寺で用ひられて居ります。寶幢院點の方は叡山の點であります。

其の他の中院僧正點、是は高野山の中院であります卽ち眞然の點であります。禪林寺點は宗睿の

創めた點であります。中院僧正點は高野山で用ひられて居ります。然し高野山のみと限つた譯でもありません。禪林寺點も古い點であります、けれども寫經に用ひられてあるのはまだ見當りませぬ古い所で實際寫經に用ひられた點はなほ後に申し上げます。

圓堂點は仁和寺で用ひられて居る點であります。所傳は宇多法皇が御創めになつたといふ事になつてゐます。宇多法皇は仁和寺に圓堂を建てゝ御出でになつた事も御傳記に見えて居りますから是は所傳どほりに宇多法皇が御創めになつたものでありませう。併し此の點はもつと古くから見えて居ります。――尤も是は點圖に見えて居るのと多少相違はありますが――であるから宇多法皇が御用ひになつては居りませう、けれども其の源流は最少し古いと見なければなりませぬ。どうも明瞭り源流はわかりませんが益信から傳つたものではなからうかと思ひます。考證を御話すると長くなりますから省きます。

香隆寺點、遍照寺點、池上律師點、池上阿闍梨點、淨光房點、水尾點、是等は圓堂點から分岐した點であります。夫はもう點圖の似て居る所其の寺で創めた點で是等の點を創めた人々の傳記を調べますと、よく其の由來が解ります。

東南院點といふのは、是は聖寶の創めた點であります。此の點の創始に就いては所傳も何もないのでありますけれども聖寶は眞然に就いた人でありますが從つて中院僧正點と非常に似た所があり

ます。のみならず之が三論宗でも華嚴宗でも用ひられて居ります事が聖寶の傳記とピッタリ合ひます。どうしても聖寶の創めた點と私は信ずるのであります。

東大寺點はそれから分れた點であります。

夫等は皆詰り眞言宗で用ひられて居る譯であります。

此の後に擧げましたのは所屬がよくわかりません。一九(觀眞點)二〇(順曉和尙點)はわかりません。順曉和尙とは誰の事かわかりません。傳敎大師が入唐せられた時に學んだ人の中に順曉といふ人があります、けれどもさういふ支那人が乎古止點を創める理由は絕對にない。或は是は石山の淳祐の誤ではあるまいかと思ひます。淳祐と順曉と發音に似た所がありますので此の名を誤つて順曉と傳へた者でなからうかと思ふのであります。實際淳祐が此の點を用ひてをります。創始者は誰としましても或は眞言宗の點かと存じます。

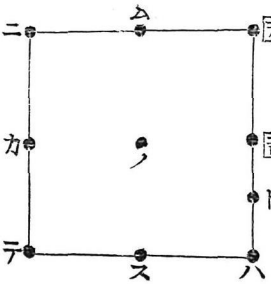
二一(天仁波流點)は名の附方が西墓點、仁止波迦點とよく似て居りますから或ひは天台の點ではないかと思ふのでありますがよくわかりません。

廣隆寺點、是は殆んど他の點圖には見えて居りませんが法隆寺所藏の點譜に見えて居ります。是れは誰が創めたかわかりませんが、廣隆寺は點の創る頃は眞言になつて居つたやうで御座いますから、これも眞言宗の點ではないかと思ひます。

夫から三寶寺點、淨土宗には三寶寺といふ名のお寺はありますけれども、淨土宗が點を用ひました事は――後にも申しますが――絶對に其の形跡はありませんから淨土宗の寺ではない。又淨土宗にならぬ前の、改宗した寺であつて、何宗かの寺であつたらうかとも思ひますけれども、更に探る手掛りがありません。

要するに十九以下の五つは所屬も解りませんのです。

斯ういふやうに色々な點があるのであります。而してそれ〴〵點が違つて居りまして、乎古止點といふ名の出ましたのは博士家の點からであります。即ち俗點の方です――眞俗二點あります中俗點の方即ち俗書の方に用ひた點から出た物でありまして――俗點の種類は申す必要がありませんから申しませんが――乎古止點の名は詰り是れ（ヲ、コ、ト）から取つた名でありまして、其れが廣く眞俗二點を指す總稱になつたのであります。古は天仁乎波點といつて居つたやうでありますが、今は一般に乎古止點と呼んで居ります。この乎古止點の名の現はれましたのは新しい事でありまして、凡そ二百年ばかり前享保前後に始めて言ひだしたのであります。其の以前には全て見えて居りません、極く新しく言ひ出した名前であります。



名稱は其の位の事にしまして、何の爲に用ひられたか、何時から用ひられたかといふ事に、は入つて行かうと思ひます。

無明所覆邪見

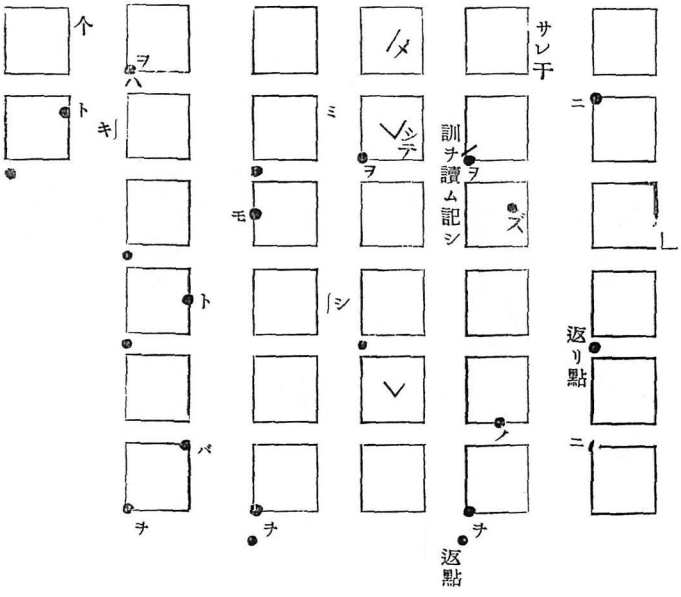
惑心不修善因

令惡憎長於諸

佛所而起誹謗

法說非法非法

說法



何ういふやうに乎古止點を用ひたものであるかと申しますと、之は漢文を訓讀する爲に用ひたものでありまして、――漢文と申しましても佛書も俗書も共に含めて申すのであります。――漢文を訓讀する爲に用ひたもので、全く送り假名と同じ目的に出來たものであります。例に依つて用方を御目に懸けます。

（讀方）　無明ニ覆はレ邪見ニ心ヲ惑はサレテ善ノ因ヲ修セズ惡ヲ[シテ]增長せしメ諸佛のミ所にシテ而モ誹謗ヲ起シ法ヲバ非法ト說キ非法ヲバ法ト說ケリ

是は喜多院點であります。詰り斯ういふ風に用ひてありまして、全く送り假名と同じ用法になつて居ります。斯ういふ風に假名と共同して用ひられて居ります。詰り乎古止點は漢文を訓讀する爲に用ひたのでありまして其の同じ用途に乎古止點と假名點とあるのであります。

（其の中の假名に就て（一）――無明所覆――は昔のレで今のやうにはねる事は決してない、必らず終ひを止めてあります。夫は（礼）の字のしから出たのでありますから……はねる時は今のゝになるのであります。（干）――惑心――はテで、古い時代の字は必ず突きぬけて居ります。今の郵便局の記しのやうな字は決してない。詰り（天）から來たのでありますからちやんと上へ突き拔けて居ります。（个）――說法――はケで（个）の字であります。）

要するに假名と乎古止點と同じ目的に生れて居りますから從つて此の二つの間の關係がどうであ

つたかといふ問題が起る譯であります。是等の事は詰り訓讀から起つて居りますから從つて訓讀が何時から始つたかといふ事と乎古止點等の起源といふ事といつも結びつけられて考へられるのであります。

古くは此の乎古止點といふものは既に應神天皇の二皇子大鷦鷯命と菟道若郎子の二皇子に王仁や阿知岐が漢籍を御敎へ申した其の時から乎古止點を用ひたといふ說を說いて居る人があります。又色々の創始者に持つて行かれる所の吉備眞備公が乎古止點の創始者であるといふ風に言つて居る人もあります。而して其の創始者を菟道若郎子に持つて行くのは、此の時代に訓讀が行はれた、訓讀の始めといふ事を菟道若郎子に置いて其處に乎古止點の起源をも置かうといふ說であります。又吉備眞備に持つて行かうといふのは訓讀は吉備公に始つた。——斯う信じて夫と同時に乎古止點が始つた——斯ういふ風に申して居る說であります。

訓讀の始めは菟道若郎子が漢籍を御學びになつた時にあるといふ事はどうしても信じなければならぬと思ひます。是に就ても隨分古くは論がありまして、訓讀といふものは其の時に始つたのではない、其の時は漢文は棒讀みしたものである、音讀したに過ぎない——斯ういふ說もあります。けれども訓讀をしなければ意味の分りやうがありませんから、然るにかゝる論のあるのは訓讀の意味

を取り違へて居るからであります。訓讀といふ意味はどうかすると素讀といふ意味とゴッチャに考へられるのであります。詰り漢文素讀と訓讀といふ事と「讀」といふ字がある爲に考違ひをするからそんな論も起るのであります。讀の字にても本來德川時代の素讀の讀のやうな義はない。德川時代にやつたやうに素讀する――漢文を譯解らずに日本讀みにして、其の上に、其の後に文句の講釋を聽く――是は德川時代の行り方であります。素讀する時には意味は解つて居ない、講釋を聽いて始めて意味が解るといふ二重手間になつて居りますが、昔の訓讀といふ意味は決して素讀といふやうな意味ではないのであります。訓讀は卽ち解釋の義であります。勿論棒讀みに讀んだ事は讀んだのでありませう。一遍字音で讀んで字音を學んで夫から訓讀したものであります。訓讀卽ち當時の日本語に直したのであります。故に古い訓讀といふ意味は決して素讀といふ意味ではない、解釋といふ意味であります。此の解釋を加へなければ意味が解る筈がないから訓讀は菟道若郎子にある可き筈である。素讀は德川時代に始めて出來たので古くは素讀といふものはない。訓點が附いて居る其の訓點は卽ち漢文を日本語に直したものであります。其の當時の日本語に直されたのであります。卽ち是が解釋であります。此の訓點が卽ち解釋であります。でありまするから菟道若郎子も其の訓讀に御依りなさらなければ、意味がわかりませんから、此の意味に於ける訓讀は無論其の時代にあつた譯であります。

さういふ譯で今申した意味に於ける訓讀は學問あつて以來いつも伴つたものでありますが、併し此の訓讀を點に現はすといふ事は何時から始まつたかといふ事は、自ら別問題で、訓讀があるから夫で直ぐ其の時に始まつたと簡單に解釋する譯には行かないと思ひます。

訓讀の問題は解決しても加點の問題は殘つて居る。今日の材料から申しますと、是は平安朝の初期でなければならぬと思ひます。現存の材料から申せば平安朝の初期に初つて居ると斯う信じなければならぬと思ふのであります。訓點を加へる事は勿論其れ迄とてもあつた筈で、講義を聽いて居る際に心覺えまでに假名をつける、――恰も今日の學生諸君がやるやうに――事はもつと前から起りつゝあつただらうと思ひます。併し訓點を附けるといふ事が一つの形式になつて、而して素本の外に點本といふものが出來た――點を附ける事が一つの形式になつた――といふのは平安朝の初期であつたと信ずるのであります。自分で心覺えに講義を聽く際にチョイ〳〵書き添へる、今日なら鉛筆で書き添へる、其ういふ程度のものは何時からとなしにあつた筈の事でありますが、加點といふことが一つの形式になつて點本といふものが出來たといふのは平安朝の初期である。……斯う信ずるのであります。少くとも現存して居る材料から申しますと、然う言はざるを得ぬのであります。其の時に手古止點が始まつたと信じます。其の前に心覺えに附けるといふ事は、夫は恐らく假名なり眞名なり――漢字の既に解つて居る言葉――で附けるといふ事は行はれて居つただらうと思

ひます。夫で訓點本といふものが訓點といふものが一つの形式をなさない以前にあつたとしても夫は文字であつた筈だと思ひます。乎古止點は一つの形式を成した時に始めて用ひらるべきものと斯う信ずるのであります。其れは乎古止點の方は、一方に點圖といふものがなければ讀めない、どうしても斯ういふ所にあるのはニである、之をヲであるスであるといふ事を、一方に圖といふものがあつて示して呉れなければ解らぬのであつて、そういふ手間の係るものを聽講の際に用ひる事は出來ませんから、始めは假名であつたのを訓點といふ事が一つの形式をなした時に始めて乎古止點が用ひられたものと考へます。

此の乎古止點は獨立で用ひられてある例は決してない。古い所には決してない、必らず假名と並用せられてあります。前に示したやうに假名と並用せられてあります。假名のみで示してある例は平安朝のずつと末から鎌倉にかけてなると無いでもありませぬが其れも極めて稀でありまして、其の以前には無い事であります。訓點を施してある場合には必ず乎古止點と假名と並用されて居るのであります。

乎古止點の材料で一番古いのは天長六年に加へられた點です。卽ち淳和天皇の年號でありますが天長六年に加へられた喜多院點、是が一番古いのであります。夫は「因明入正理論疏」に加へられて

あります、夫が興福寺にあります。但し夫は原本ではありませぬ、後の寫本であります。其の次には「百論」一卷でありますが、久原文庫にあります。天安二年正月の點がは入つて居ります。是等を始めとしまして天曆頃迄の點を調べて見ますと喜多院點、東南院點、西墓點、仁止波迦點、圓堂點、順曉和尙點、是れ丈が見えて居ります。斯う申しましても喜多院點と順曉和尙點は今日あります點圖と殆ど合ひますが其の他の東南院、西墓、仁止波迦或は圓堂點であるとか申すものは、其の點の一流であるといへるのみで、今日の點圖では讀む事は出來ないのであります。今日の點圖と大部違つて居ります。只其の流の點であるといふ事が解る丈で非常に違つて居りまして今日の點圖では讀む事が出來ないのであります。

其ういうやうに今日點譜に載つてゐる點圖は今申しました二十三ありますが、あの中で寫經に用ひられてない點もあります。また用ひられて居る點でもあの點圖で讀める御經といふものは古い所には殆どありません。でありますから二十三擧げましたけれども實際寫經に用ひられて居る點といふものは無數であります。多少の相違で皆違つて居ります。併し此の喜多院點といふものは何時出て來ましてもほゞ一定して居りまして殆ど點圖其の儘であります——全然とは申しませんが……其の他のは點譜の點圖では迚も讀めないのであります。夫れ程違つて居ります。寫經に加へられてある乎古止點を實際に點圖で讀むには特別の研究を要するのでありまして、其の上今申しましたや

うに假名と乎古止點が並用せられて相竢つて讀むやうになつて居りますし……其の例を示して見ますと斯ういふ複雑な事になります。文章は省きまして字丈で申します。

聞（ヒカテ）　是は知恩院にあります所の玄奘三藏の表啓の文句の中にあります。平安朝の初期の點で何時附けたのか年月はありませんから確かにはわかりませんが平安朝の初期の點であるといふ事は疑ないのであります。之は何と讀むのかといふと詰り「ヒ（ラ）カ（レ）テ」ヒ、カは假名が乎古止點で現はしてあります、全體の一部分が假名と乎古止點で現はされてありまして（ラ）と（レ）と補うて見なければ讀めないのであります。又同じ文句の中に

圖（トテハ）　是は乎古止點でハ、ヲ、トを表はしてあり、其に二字假名が添へてあるのであります。是は「假名遣及び假名字體沿革資料」の中に大矢透氏は此の二文字を「ヅエ」と讀まれたm、川の二文字は共に州字から發達したもので、今日はしゆうの音でありますが古くはつうといふ音があつた。此の中の點を三つ取つてm、中の棒を三つ取つて川と都合二種つの字が出來て居る。今日の片假名は三點中の右の點をはねたもので（ツ）ある。大矢氏は（リ）を川の一劃を略したものと見て（つ）と讀み、下のを（ヱ）と讀まれたのである。併し本文を讀んでも、（ツヱ）では意味をなさない。之は乎古止點を閑却したから起つた誤であります。之はリはり、ヲはこ。己が發達して今日の「こ」が出來たので、詰りこであります。即ち此の二字は（リコ）であります。然らばどう讀んだ

かと申しますと、ハ(カ)リゴトヲと讀んだのであります。前きのはラ、カ之はカを補うてあとは假名と乎古止點で讀むやうになつて居ります。斯う云ふ複雜な加點方になつて居ります。

古い時代の點は假名の點と乎古止點と附いて居る場合は乎古止點と假名と重複する事は決してない、必ず別々でありまして兩方一緒にして一つの言葉を成すやうになつて居ります。勿論數の中には打ち損ひもありませう重複した場合も稀に無いではない、文字でも書き誤りがあるやうに打ち誤りがあつても十中九迄は重複する事は決してない、必らず假名と乎古止點と相竢つて讀むやうになつて居るのであります。而して此の附方でも御解りになるやうに、昔の點といふものには矢張り一種の秘密性を伴つて居つたと考へられます。一方に點圖を隱してありますれば、容易なことでは何と訓んだものか分りませぬ。乎古止點も星點で示す丈なら簡單でありますが、乎古止點はさういふ簡單なものではない。色々の點を方々の位置に配置してある、(／—L)色々な線で示した點もあり又星點にも(・・・・・)上のやうに色々なのがある。其の上に片假名等から發達したのもあり、其れが又位置によつてそれ〴〵訓み方が違つて居るというやうな譯で、非常に複雜なものでありますからどうしても一方に點圖といふものがなければ、此の加點を見た丈では讀めない。であるからどうしても點圖を見せなければ讀めない事になるから、其處に秘密性があつた事は想像出來ます。假名の點でも前記のやうな附け方でありますから、是丈見ては何の事か譯らぬ、どちらにしても點の附け

方には非常に秘密性があつたといふ事はわかるのであります。

それでありますから密部のものに此の點は非常に餘計用ひられたのでありました。天台宗、眞言宗の台密東密と密部に餘計に用ひられて居ります。此の點圖は、最も秘密にして居ります事相部のものと一所の箱に入れて秘密にして居るといふ事實で觀ても全く秘密なものとして取扱つて居た事は疑ふ餘地はないのであります。

何の爲に秘密にして居つたか直接師匠に就いて習はないものも讀めるやうにして置くと折角の尊い御經も半知半解の想像で早合點して誤解をする事がある。さういふ誤解があつては申譯ないから誤解がないやうに、師授を受けた後に間違なく讀むやうに……さういふよい意味のあつた事も考へられますが、又一方には自分の讀み方を人に知らせまいとしたよくない方面の考も交つて居つたと思ひます。と申しますのは平安朝の初期は學問が非常に盛んであつた時代であります。一々申しませんが、官學の外に私學、――私立の學校の續々出來た時代であります。續日本記等で見ますと中には藏書を非常に持つて居り乍ら秘密にして人に見せなかつたといふ記事が出て居ります。又互ひに黨派を立てゝ往々門弟子共が爭うて居るやうな記事が見えて居ります。其の時代には學問が盛んになつた餘弊として、知識を競つた餘弊として、各々自分の說を人に紊りに知らせまいといふ傾

向が現れて居た事がわかります。さういふ記事は佛門の方には何にも記事がありませんけれども同樣の事が矢張り佛門の方にもあり得たといふ事は考へられるのであります。秘密性には善い意味で秘密にするのと、餘り善くないやうな方面の……自分の說を傳へまいといふ意味から隱されたといふ事も考へられるのであります。さういふやうに秘密を保つといふ點からは乎古止點は最もよい符號でありますから一時非常に榮えたのであります。

一時非常に榮えたのでありますが鎌倉時代になりますと從來の點を單に寫し傳へて居るといふ丈でもう生命がなくなつて居つたのであります。でありますから鎌倉時代に起つた所の新佛敎は一つも乎古止點を用ひて居りません。新たには入つて來た禪宗も無論此の乎古止點を用ひません。淨土宗も用ひてありません。淨土眞宗にも日蓮宗にも鎌倉佛敎には一つも用ひてありません。古い宗派を複興した人でも——例へば律を再興した興正菩薩であるとか或ひは華嚴を研究した所の東大寺の宗性であるとかいふやうな人達も此の乎古止點を用ひて居りません。新佛敎が用ひなかつたのみならず舊佛敎を中興した人達もゝう既に此の乎古止點を用ひて居ないのであります。さういふやうに乎古止點といふものは平安朝に於て興り且つ榮えたもので鎌倉期になると零落期になつて生命が失はれて居るのであります。

さういふ譯でありまして此の乎古止點は直接に眞宗には關係を有たないものであります。併し學問に限らず總て物は何事も徹底的でなければならぬと思ふのであります。眞宗を理解するといふには矢張り佛敎全部を理解しなければならぬと思ふのであります。佛敎といふ事を國の關係を離れて佛敎その物としての研究もあり又國家と關係して佛敎を研究する必要もあらうと思ひます。

佛敎の研究の中には二つの見方がある、國を離れて研究する丈でなし國と結び付けて研究するのも一つの研究と思ひます。宗敎の目的としては、寧ろ後者が大切ではないかと思ひます。

古人の經典訓讀を研究するにもまた二つの目的があると思ひます。一つはたゞ讀み方其の物の參考資料として古人の讀方を見るための研究であります。他の目的は先德が此の經文をどう理解して居つたゞらう？といふ事を見る上に亦古人の訓讀を調べるのであります。古人がどう讀んで居つたといふ事が解れば其の經文を其の時代が或ひは其の人がどう理解して居つただらう？といふ事も解ります。是は日本佛敎（國と關係しての佛敎）の敎義の發達を觀る上には是非必要な事と思ひます。私はよく知りませんけれども法華經にしましても色々の人の、天竺から支那への飜譯がありまして其の飜譯に多少相違があるといふ事であります。是は畢竟讀み方解釋に相違があるからでありますこの解釋の相違理解の相違といふのは敎義宗派分岐の源流を爲すものであります。日本に於ても或

る人が或ひは或る時代が夫をどう讀んで居つたか、どう理解して居つたかといふ事によつて其の教義は何處に胚胎して居るかといふことを知る事が出來ます。……成る程斯う讀んで居つたから斯ういふ風に教義がなつて來る譯である……斯う云ふ事を見る事が出來るのであります。

然ういふ風の見方から申すと其の讀み方は訓み方としては間違つて居つても違つて居れば違つて居るなりに又役に立つ譯であります。誤つてゐても正しくても此の目的の上には同等の價値を有つのであります。而して其の時或ひは其の人はどう理解して居つたかどう解釋して居つたかといふ事を見るには是非共此の古人の讀み方を一往研究する必要があらうと信ずるのであります。若し古人の讀方の研究の必要をそこに認めれば、其の古人の讀み方を見るには是非乎古止點に依らなければならぬのであります。卽ち其處に乎古止點の研究といふ事は是非必要となつて來ると信ずるのであります。

若狹の妙玄寺の義門上人は國語を非常に研究なさつた方であります。其の國語の研究に依つて我々までも非常に益を得て居るのであります。其の國語の研究は何の爲であつたかといふと假名聖教を徹底的に理解するには國語の眞の智識がなければならぬといふところからであります。かくて義門上人は國語の研究をなさつたのであります。學問はかういふやうに徹底的でなければならないのであります。日本に於ける佛教――日本佛教史を徹底的に研究しようとするならば必らず古人の經

の讀み方を研究する必要があると思ひます。そこから出發しなければ何にもならぬと思ひます。

私が乎古止點研究を思ひ立ちましたのは國語を研究する爲でありまして、德川時代に於て立派な學者が出まして國語の研究は非常に進歩しました。併し遺憾ながら其の時代には第一資料を見る事が出來なかつた。皆古今集、源氏物語、さういふものに依つて研究して居るのであります。所が不幸にして貫之の實際書いた(古筆家が貫之の筆と稱するものはありまするが)、古今集は殘つて居りませぬ。源氏物語も紫式部の書いた者は殘つて居りません。のみならず源氏物語は平安朝に書いた物も殘つて居りません。鎌倉時代のが漸く殘つて居るのみであつて何れも根本資料とする事は出來ないのであります。德川時代の諸大家は根本資料を見る事が出來ないから止むを得ず夫に依たのでありますが、今日の如く根本材料が見られるに係はらず從來の研究で甘じて居る事は出來ませんので、國語の根本資料を得る爲に乎古止點の研究を始めた譯であります。何でも根本的でなければならぬ、根柢を確かにしなければ幾ら上から研究を重ねて行つても畢竟沙上の樓閣でありまして更に學問的價値はないのであります。日本の佛教史を根本的にやらうといふ時には先づ古人の讀方を研究する必要があらうと思ひます。普通の歷史家がするやうに、たゞ記錄にばかりたよるやうでは駄目です。古人の讀方を見るにはどうしても乎古止點を研究しなければならぬと思ふのであります徒然草の中にあります話で皆さん御承知でありませうが、說教師になるには遠行する必要があると

いふので、先づ馬に乘る事等を稽古した、その馬乘等の稽古をしてゐる中に一生は終つたといふ話がありますが、乎古止點の研究も或ひは夫に類した事になるかも存じません。乎古止點をやつて居る中に、古人の讀方を見るといふ本當の目的に到達しない中に一生を終つて終ふやうになるかも知れませぬ。けれども夫は馬の稽古と違ひまして、此の階段は是非踏まなければならぬ階段で、此の階段を作つておけば次の研究者はそこから出立して行く事が出來ますから、二代三代重ねます中には眞の目的が達せられるのであります。之は決して今の馬の稽古と同じに見る事は出來ないと思ひます。

嘗て私が學生時代に坪井九馬三先生が「文科の仕事は椽の下の力持ちをして居るのだ」と言はれた事を憶えて居ります。吾々の仕事は世間に現れずに濟む事は必らずあり得ると思ひます。けれどもさういふ努力は自然に世の中に認められるものでムります。認める認めないはさて擱きまして、我々人間として此の時代を次の時代に渡す時にはより善き時代として渡す必要があるのであります。より善き時代を渡す義務があると思ひます。我々の仕事はよし椽の下の力持ちで終つても、誰が認めてくれずとも、人間として此の時代をよりよき時代として次の時代に渡して行く必要上、義務上何らか致さなければならぬと思ふのであります。人各々專門があります、其の專門に立籠つて決して壞れない、確固した土臺を築き建てゝ、其の土臺の下に研究を進めなければならぬと思ひます。功を急ぐといふと、とかく土臺を十分に堅めないで、前へ〳〵と進みたがるものであります。然し

それでは何にもなりませぬ。何返でもくり返すばかりで、次の人は復最初から同じ手數を繰り返さなければならないので、――同じ所を往來するばかりで――更に進歩がありませぬ。さう云ふ事のないやうに確かな土臺を築いて進まなければなりませぬ。

前申したやうなわけで日本佛教史の確かな土台を築くには乎古止點の研究から始めなければならぬと信じます。此の研究は一時世間とかけ離れて、椽の下の力持ちの觀を呈することもありませうが、夫は根柢を築く第一歩であります。

私の乎古止點研究は未だ本當に手繰り出したばかりでありまして、私自身に於ても之を材料として國語を研究する所迄參つて居らないのであります。あの研究は非常に眼が疲れまして、朱で加へてあるのは未だよいのでありまするが、胡粉を以て加へたのもありまして、其れには剝落をして居て極めて見にくい場合が多いのであります。纔かに日に透して見るとか色々苦心をしなければ點の加へてある場所が判らない。たゞ上から見るといふと點などはないやうに思はれる事が多いのであります。我々四十代になりますと直ぐ眼が疲れまして仲々捗がゆきません。若し若い方がさういふ事に盡して下さるならば其の研究は日本佛教史料として古人の經典の解釋を調べる爲にも役立ちますのみならず、又恰も義門上人のして置かれた仕事が我々如き國語其の物の研究者に取つても亦役

立つ如きものであります。

今日の講演が御緣になりまして、さういふやうな事に志す方が若し出來ましたならば私は望外の光榮と思ふのであります。極くざつとでありますが、乎古止點の一と通りを御話した積りであります。（完）

（附言）　右は昨年十一月十四日に開催した本會の公開講演の速記でそれを講師の校閲を願ひ更にその添削を經たものである。

（編輯委員）